

歌の周辺

キリンは四つの足も首も長くて、地上にすらりと高く佇んでいるが、キリンを見上げている自分は低く小さく、しかも内部に暗いものを抱えて生きている。でも人間だから仕方がない。……そんな気持ちで作った歌である。「あきかぜ」は、歌にリアリティを持たせるために空想で添えた。

今年出版された『短歌部、ただいま部員募集中』の中で、小島なおさんが、高校時代の自分を回想しながら、「この作者は私と同じように、自分のことを暗いかたまりだと言っている。そのことがこんなにも歌を光らせている」と書いてくれたのが嬉しかった。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・7

あきかぜの中のきりんを見て立てばあ
あ我といふ暗きかたまり

——『汽水の光』

【鑑賞】屋外に立つキリンの伸びやかな肢体
しかしそれはどこか異形でもある。ふりかえ
って自分の身体を思えば、皮膚が小暗く内部
を覆っているだけだ。心はあるのか。自分は
何者なのか。しばし呆然とキリンに問う。ア
イデンティティを思う青春期の歌だろう。た
だ、効果的にア段音、イ段音が配置され、繊
細ななかにも明るく未来へ向かう印象を保つ
ている。

(大松達知)



ふるさとコレクション——178

安岡ねぎ（山口県下関市）

安岡ねぎは河豚ねぎとも呼ばれる太さ1~3ミリほどの超極細のネギで下関のフグ料理には橙のポン酢、もみじおろしと共に欠かせない食材である。小口切りにして薬味に、或いは3~5センチの長さに切ってフグの薄い刺身で巻けば緑が透けて目にもおいしくシャキシャキした食感が味わえる。

明治時代、伊藤博文公によりフグの禁食令が解かれて以来、下関の安岡町横野で生産されてきたフグ用のネギ。横野地区は沖積砂地が多く高燥のため昔は畑ごとに灌水井戸を備えハネツルベという装置を使って手で水を汲み上げたと聞く。

千住ねぎの種子を元に品種の改良，土壤の改良を重ね栽培されてきて県の内外に高い評価を得ている。また，安岡ねぎの歴史と生産者の思いの伝わる束ね方が美しい。横に揃えたネギの根元から5~6センチ上を「常磐」と呼ぶ萱で束ね真ん中を稲藁で結ぶ。この萱は響灘に面する横野に群生し防風の役目を果たしてきたもの。「常磐」に束ねられ出荷を待つ安岡ねぎには風格を感じる。

（写真・解説 阿野 康子）